

【本編】

第一章 理科準備室の特別補習

第二章 純潔の境界線……19

第三章 緋色の卒業式……36

第四章 禁忌の放課後、永遠の補習……55

【番外編】

学外における生体観察……70

従順メイドの奉仕実習……80

男子トイレの深淵……90

最終章……101

第一章 理科準備室の特別補習

窓から差し込む斜光は、夕刻の琥珀色を帯びていた。その光の柱の中で無数の埃が金色の砂のように、ゆらゆらと、あるいは懶げに舞っている。

部活動に励む生徒たちの喧騒が遠く校庭の方へと去り、旧校舎の廊下は深い水の底に沈んだかのような静寂に包まれた。

高等部の二年、一之瀬しおりは、静まり返った廊下で自らの鼓動を耳にしていた。

抱きしめた補習ノートの角が胸に食い込む。その痛みさえも、これから訪れる時間への期待と正体不明の不安を増幅させるスパイスでしかなかった。

「……失礼します」

重厚な木製の扉——理科準備室の入り口。しおりが控えめにノックをすると、中から低く、しかし驚くほど澄んだ声が返ってきた。

「入りなさい。待っていたよ、一之瀬さん」

扉を開けると、そこには薬品の匂いと、古い紙の匂い、そして僅かながら「男」を感じさせるインクの香りが混じり合う、濃密な空気が停滞していた。

先生は窓を背にして座っていた。逆光の中に浮かび上がるシルエットは彫刻のように無機質で、それでいて完成された美しさを持っている。銀縁の眼鏡が夕日を反射し、彼の眼差しを読み取らせない。

「……遅くなって、申し訳ありません」

「構わない。放課後は、誰にとっても自由な時間だからね。……だが、今日から始まる私の『特別補習』は誰にも邪魔されてはならない聖域だ。まずはその扉に鍵をかけなさい」

乾いた金属音が室内に響く。それは、しおりが「生徒」という守られた殻を脱ぎ捨て一人の「供物」としてこの密室に閉じ込められた合図だった。

「さて。君の最近の成績だが……特に生物の、生殖機能に関する理解があまりに潔癖すぎるよ

うだ」

先生は立ち上がり、ゆっくりと、しかし確実に距離を詰めてくる。

真っ白な白衣がしおりの制服のすぐ近くで翻る。

「教科書に書かれた文字をなぞるだけでは、生命の本質は理解できない。……そうだね、一之瀬さん。今日はまず、君という個体の『純潔』が、どれほど脆く、そして美しいものなのか……それを解剖学的に検証してみようか」

先生の手がしおりの顎を優しく、だが抗えない力で持ち上げた。

眼鏡の奥で氷のように冷たく、獲物を慈しむような情欲を孕んだ瞳が彼女を射抜いた。

「……せん、せ……?」

顎を持ち上げられ、至近距離で見つめられたしおりは、ただ当惑に瞳を揺らすことしかできなかった。

先生の言葉はいつも難解で、彼女の小さな頭では半分も理解できない。

生殖機能、解剖、個体の純潔――。並べられた単語のどれもが学校の授業で習う清潔な響きとは異なり、熱を帯びて鼓膜にまとわりつく。

しおりは無言のまま小鳥のように僅かに首を傾げた。潤んだ瞳が「どういう意味ですか？」と、言葉にならない問いを投げかける。

「……ふふ、その無垢な反応。期待以上だよ、一之瀬さん」

先生の唇が満足げに弧を描いた。彼の手が顎を離れしおりのブラウスの襟元へと滑り落ちる。

カチ、と微かな音がした。それは、先生の指先が、最も上にある第一ボタンを軽く弾いた音だった。

「ひゃっ……！？」

しおりの喉から可愛らしい悲鳴が漏れる。

指先が直接肌に触れたわけではない。それなのに、布地を隔てて伝わる確かな『熱』と、執拗なまでの『重み』に、彼女の背筋を言いようのない戦慄が駆け抜けた。

「動いてはいけないよ。これは君の身体が、どれほど正しく、あるいは淫らに反応するかを確かめるための『身体検査』なのだから」

「けん、さ……？　でも、あの、お洋服……脱いだら、いけないって……」

「教壇に立つ私が、いけないことをするとでも？　これは、君を正しい女（おとな）へと導くための、正当な教育課程だ。……いいかい、君は私の教えを、一滴も零さず受け取ればいい」
先生の指が滑るように第一ボタンを穴から押し出した。途端に首元に放課後の冷たい空気が入り込み、しおりは身震いする。

続いて第二ボタン。指先がしおりの鎖骨のくぼみを、わざとらしくゆっくりと撫で上げる。

「あ……う……」

しおりは再び困惑したように首を傾げた。触れられた場所がじりじりと熱い。友人たちにもこんな風に触れられたことは一度もない。

恥ずかしい。逃げ出したい。けれど、眼鏡の奥で光る先生の瞳が、蛇に睨まれた蛙のように彼女の自由を奪っていた。

何より厳格で立派な先生が「正しいことだ」と言うのなら、自分が感じているこの「おかしい気持ち」の方が間違っているのだと、純粋な彼女は思い込まされてしまう。

第三、第四――。淡々と、けれど確実に、しおりの純潔を隠していた布地が左右へと割られていく。

やがて夕闇が混じり始めた光の中に、しおりの真っ白な下着が、そしてその奥に潜む未成熟な果実のような膨らみが無防備に晒された。

先生の指先が今度は下着の縁に沿って滑るように這い始める。

「!？……せん、せ……そこ、は……め、です……」

「何が『だめ』なのかな？ 理由を説明しなさい。説明できないのなら、それは君の勝手な我儘だ。私は君の知らない君自身を、今から解剖してあげようとしているんだよ」

しおりは、涙を溜めた瞳で再び小さく首を傾げた。

何がだめなのか説明できない。けれど、身体が勝手に熱くなって、足の先が丸まってしまふ。先生の白い手袋が、今度はしおりの柔らかな胸の膨らみを、下着越しに逃げ場を塞ぐように包み込んだ。

「ど、道徳的に……いけないこと、だからです……」

しおりは消え入るような声で、必死に言葉を絞り出した。けれど先生は、その言葉を待っていたかのように低く艶やかな笑い声を漏らした。

「道德？ 実に形而上学的で実体のない言葉だ。一之瀬さん、道德とは『集団の平穩を保つための仮初のルール』に過ぎない。対して、今私が行っているのは『生命の真理への到達』……科学だよ。君は自分の倫理観という狭い物差しで、学問の進歩を妨げるつもりかな？」

「……？」

しおりは再び、小鳥のように無言で首を傾げた。道德よりも、学問の方が大事。先生の口から語られるその理屈は、純粹なしおりにとって抗いがたい聖書のような重みを持って響く。

「そうだ。例えば、この布地……」

先生の長い指が、下着のレースの縁をなぞり、しおりの未熟な乳房を圧迫した。

「この繊維は、君の呼吸を妨げ皮膚の微細な変化を観察する邪魔になっている。これを外すことは、君という個体を正しく『理解』するためのプロセスだ。理解を拒むことは、成長を拒むことと同じだよ。……君はいつまでも何も知らない子供のままでいたいのかい？」

「ちが、います……」

「なら、私を信じなさい」

先生の指先が、しおりの背中側へと回り込んだ。薄いブラウスの向こう側で、ホックが小さく絶望的な音を立てて外れる。

途端、これまで胸を支えていた束縛がふわりと解け、しおりは心許なさに身を縮めた。

「あっ……あ……」

先生は焦らすように、すぐには下着を取り去らない。わざと緩んだ肩紐を指で弄び、じわじわとしおりの羞恥を煽る。

しおりは赤くなった顔を伏せ無意識に自分の肩を抱こうとしたが、その手は先生の冷たい視線に射抜かれて止まった。

「手を下ろしなさい。観察対象が自分を隠してどうする」

「……はい、せんせ……っ」

しおりは涙目で首を傾げながらも、震える手を膝の上に戻した。やがて、先生の手によって純白の下着が取り去られる。夕闇に染まり始めた理科室の中で、しおりの上半身は、剥きたての果実のように無防備な白さを露呈した。

「……素晴らしい。乳頭の突起、周辺の鳥肌反応……。これは『羞恥』という刺激に対する生理現象だ。……さて、次は下半身のデータも必要だね」

先生はしおりの細い腰に手を添えると、抗う暇も与えず部屋の中央にある冷たい実験台へと彼女を促した。

革張りの台はひんやりとしていて、しおりは座らされた瞬間に小さく跳ねる。

「足を揃えて、端にかけなさい」

「あ、あの……スカート、は……？」

「脱がせる手間を省くために今は捲り上げるだけでいい。……それとも、今すぐ全部脱ぎたいのかい？」

「い、いえっ……そんなこと……！」

しおりは慌てて首を振るが、その仕草さえ先生には愉悦でしかない。先生はしおりの前に膝をつき、まず彼女のローファアを丁寧に脱がせた。

続いて、白く長い三つ折りソックスに指をかける。膝下から足首へ、ゆっくりと。靴下が下げられるたびに、外界に晒されたことのない真っ白なふくらはぎが、夕日に照らされて浮かび上がる。

「足首が細いな。歩行よりも誰かに縋り付くために詭えられたような形だ」

しおりは、自分の足に触れる先生の指先の感触に、奇妙な高揚を覚え始めていた。くすぐったくて、けれどその指が離れるのが怖いような。

先生の指先は、今や靴下を脱ぎ捨て、しおりの太ももの内側――スカートの裾が隠している。スカートの裾を掴まれ、太ももの付け根まで一気に捲り上げられたしおりは、自身の股間に通る夕暮れの冷たい空気に身震いした。膝を揃えようとするが、先生の肩がその間に割り込み、無理やり左右へと押し広げられる。

中
略

教室内が微かな笑い声に包まれる。「優等生の一之瀬がぼーっとしているなんて」という、クラスメイトたちの無邪気な好奇の視線。

しおりは赤くなった顔を伏せスカートの裾をぎゅっと掴んだ。

指先に触れるプリーツの感触。そのすぐ下には秘部を隠す布地が一切存在しないという事実が、彼女の思考を真っ白にする。

「よろしい。では、今日の講義を進めよう。教科書の一八〇ページを開きなさい。……テーマは『生物の生殖戦略と分泌液による受容の証明』だ」

チョークが黒板を叩く硬い音が響く。先生は淀みない動作で子宮の断面図と、そこに分泌される粘液のサイクルを書き込んでいく。

「生命は受精を成功させるために自らの肉体を劇的に作り変える。……例えば、受容期を迎えた雌の個体は、粘膜の浸透圧を変化させ、外部からの侵入を容易にするための『潤滑液』を自

ら生成する。一之瀬さん、これは個体の意思によるものかな？それとも、本能かな？」

「え……あ、っ……えっと……」

困惑したように小さく首をかしげた。先生の問いかけが、あまりにも昨夜の「あのこと」を指しているように聞こえて、膝ががくがくと震え出す。

「……意思？」

「いや、答えはどちらでもない。生命というシステムにおける『不可逆な強制力』だ。メスの個体は、優れたオスの刺激を一度受けると、細胞レベルでその熱を記憶する。……たとえ理性が拒んでも、その奥深くでは、再び暴かれる瞬間を待ちわびて勝手に蜜を溢れさせてしまうのだよ」

椅子に座っているクラスメイトたちは、先生が「一般的、かつ学術的な話」をしていると信じて疑わない。

けれど、しおりだけは知っている。先生が今、教室全体を使って、自分一人を言葉で『解剖』しているのだということを。

「生命は汚れることで完成される。……さあ、座りなさい」

しおりは力なく椅子に腰を下ろした。木製の硬い座面が、スカート越しに秘部を圧迫する。

先生の授業は、まだ半分も残っている。けれど、しおりのナカは、先生の語る「生物学」という名の愛撫によって、すでに昨夜よりも甘く淫らに濡れ始めていた。

放課後を告げるチャイムは、しおりにとって執行猶予の終わりを告げる音だった。

クラスメイトたちが部活動や談笑へと散っていく中、しおりだけは重い鉛を飲み込んだような心地で、旧校舎の廊下を歩んでいた。一步、踏み出すごとに、スカートの下の「空白」が冷たい空気を孕んで揺れる。

授業中に先生の言葉によって芽吹かされた熱は、歩く振動で秘部の粘膜を刺激し、じわじわと透明な蜜を太ももの内側へと滴らせていた。

「……せんせ……、きました……」

理科準備室の扉を、震える指先でノックする。扉が開くと、そこには白衣を纏った先生が、理科室の主として、あるいは残酷な神父のように待ち構えていた。

「授業中の君は、実に『生物学的』な良い表情をしていたよ。……特に、私が粘液の分泌について触れた時、君の膝がどれほど激しく震えていたか、気づいていたかな？」

しおりは顔を真っ赤にして、逃げ場を失った小鳥のように首をかしげた。先生は扉を閉め、迷いなく鍵をかける。その金属音は、彼女の理性を切り離す断頭台の音だ。

「さあ、実習の続きを始めよう。まずは『検体』の準備だ。……昨日の実験台の上へ」

「きよ、今日は……なにをするんですか……？」

「昨日は指先による『初期衝動』の観察だった。今日は、より客観的なデータを取る。……高等生物の産道が、異物の侵入に対してどれほどの柔軟性と『受容性』を持っているかを測定するんだ」

先生がデスクの上から取り出したのは、磨き上げられた一輪挿しのような、透明な硝子棒（ガラス棒）だった。

夕闇の光を反射して、それは無機質に、そして鋭く輝いている。

「……それ、で……なにするんですか……？」

「確認するんだよ。君のナカが、正常に動くのかをね」

先生はしおりを実験台に伏せさせた。昨日のような仰向けではなく、四つ這いの姿勢。

スカートが腰まで捲り上げられ、下着を履いていない無防備な臀部が、理科室の冷たい空気の中に晒される。

「ひっ♡」

「実験台の温度は君の体温を際立たせるために最適化してある。……昨夜の指導がまだ残っているようだね。入り口が、昨日の蜜を乾かす暇もなく新たな悦びを求めて拍動している」

先生の手袋をはめた指が、しおりの割れ目を左右に押し広げる。

そこには、朝からずっと下着を履かずに過ごしたことで、極限まで過敏になった秘部が、赤く熟した果実のように待ち構えていた。

「!？♡♡ あ、あ………せんせ、そこ………♡ 広げないでください………っ!」

「学者が検体を見なくてどうする。……一之瀬さん、今からこの硝子を差し込む。君の仕事は、それがどれほど奥まで達したか、脳がどのような感覚を覚えたかを、正確に私に報告することだ。……いいかな?」

くちゅ♡♡♡

しおりの言葉を遮るように、冷徹な「硝子」が彼女の狭い入り口をこじ開けて侵入した。

指よりも硬く、体温を持たない異物。それが未通じの粘膜を強引に押し広げ、内壁を内側から引き絞るように突き進む。

「い、いたい……っ、せんせ、いたい、ですっ……！ や、あぁっ、お腹が、裂けちゃう……っ！」

「痛みは、神経が新しい情報を処理している証拠だ。……そのまま耐えなさい。今、君のナカは、硝子の硬さに合わせて、自身の形を歪め、変容させている。……ほら、痛みが熱に変わってきただろう？」

先生は硝子棒を、執拗に、ゆっくりと回転させながら奥へと進める

中
略

「……男子たちがすぐ外で話しているというのに、君のナカは、こんなにも淫らな音を立てて私の靴を欲しがっている。……一之瀬さん、君の『清純』という看板は、この男子トイレの汚水溜めに捨ててしまったのかな？」

「ちが、……ちが……っ」

先生が、自身の熱く剛直な「教育」を、彼女の入り口に押し当てた。

狭い個室。逃げ場はない。

「……入れなさい。君の汚れた欲望を、私がすべてこの中で受け止めてあげよう」

先生が、一気に腰を沈めた。

「あ、がっ……あ、あ、あ♡♡♡」

しおりの絶叫が、個室の天井を突き抜け、男子トイレ全体に響き渡った。

「……え、今の声……？」

「おい、マジかよ……女子の声じゃねえか……？」

外の男子生徒たちがざわめき立つ。けれど、先生は止まらない。むしろ、見つかる寸前の危うさを楽しむかのように、さらに激しく、深く、しおりの最深部を打ち据えた。

——くちゅ、じゅぷ、ぐちゅうっ……！！♡♡

しおりは狂ったように首を振り、よだれを垂らしながら絶頂へと駆け上がる。優等生の仮面も、羞恥心も、すべてはこの男子トイレの不潔な空気の中に霧散していった。

外で扉を叩く音が響く中、しおりは先生の肩に噛み付き、最後の一滴までを注ぎ込まれる。

「セックス！セックスしてる！？」

「…ああ。そこで聞いてろ」

先生の言葉に、扉の外の男子生徒たちが凍りついたような静寂に包まれる。だが、それも一瞬のことだった。

「……マジかよ」「本当に……やってんのか……?」

戸惑いと、信じられないものへの興奮。壁一枚隔てた向こう側で、男子たちの荒い鼻息と、扉に耳を押し付ける気配が伝わってくる。

先生は再び、さらに硬く、さらに猛々しく怒張した剛直をしおりの背後から突き立てた。

「あ、がっ……あ、あ、ああああ♡♡♡♡♡」

先ほどの「個人教授」のような丁寧さは、そこには欠片もなかった。先生は獣のような唸り声を上げ、しおりの腰を砕かんばかりの力で掴むと、容赦のないピストンを叩き込み始めた。

しおりは、自身のクラスメイトたちがすぐそこにいる恐怖に身を震わせた。だが、その恐怖は瞬時に、脊髓を焼き焦がすような狂おしいまでの背徳感へと変換される。

「……彼らが崇拜する一之瀬しおりが、今、男子トイレの壁に押し付けられ、中をめちゃくち

やに搔き回されている……。その『音』を、彼らにたつぷりと聞かせてやればいい」

先生はさらに腰の動きを激化させた。

じゅるうつ♡♡ぐちゅ、じゅぷうつ!!♡♡

肉と肉が激しくぶつかり合い、粘膜が引き絞られる生々しい音が、狭い個室の中で増幅され、廊下まで響き渡る。

「(あ、あ、あああああッ!!♡♡　すごい、おと、すごい……っ!!♡)」

しおりはよだれを垂らしながら、自身の内側から溢れ出す蜜の音に、脳の芯まで痺れさせた。

「おい……聞こえるかよ、あの音……。マジで、ハメてんぞ……」

「ぐちゅぐちゅ言ってる……。一之瀬……一之瀬の声なのかよ、これ……っ」

外の男子たちの声。彼らが今この瞬間に行われている凄惨なまでの「交尾」を想像し、興奮している。その事実が、しおりのナカをさらに熱く、キツく締め付けさせた。